

穴をのぞく／むすんでひらいて、またむすぶ

2025年 1月2日(木)－3月30日(日)

会場：常設展示室

※月曜休館 ただし、1月13日(月・祝)、2月24日(月・休)は開館、1月14日(火)、2月25日(火)は休館。

※学会員によるギャラリートーク 1月5日(日)、2月8日(土)、3月16日(日)

※ふくふくおはなし美術館(対話型鑑賞会) 2月16日(日)、3月20日(木・祝) いずれも午後2時より

穴をのぞく

穴は新しい世界への入口 アナザ・ワールドへようこそ

私たちの身のまわりにはたくさんの「穴」があります。意識して見ないと見過ごしてしまいがちですが、日々の暮らしの中でもよく見ると穴だらけ。服を着るときにボタン穴に通すボタン自体にも穴。袖の穴に腕を通し、靴の穴に足を入れて履きます。食べ物に目をやれば、ちくわやドーナツ、レンコンなどにも穴。買物する時にあける小銭入れの中には、真ん中に穴があいた5円玉と50円玉。外を歩けば道路の穴をふさぐマンホールがあり、ポストの穴に郵便物を投函し、飲料を飲んだあとの空き缶は空き缶BOXに投入。挙げていけばきりがありません。

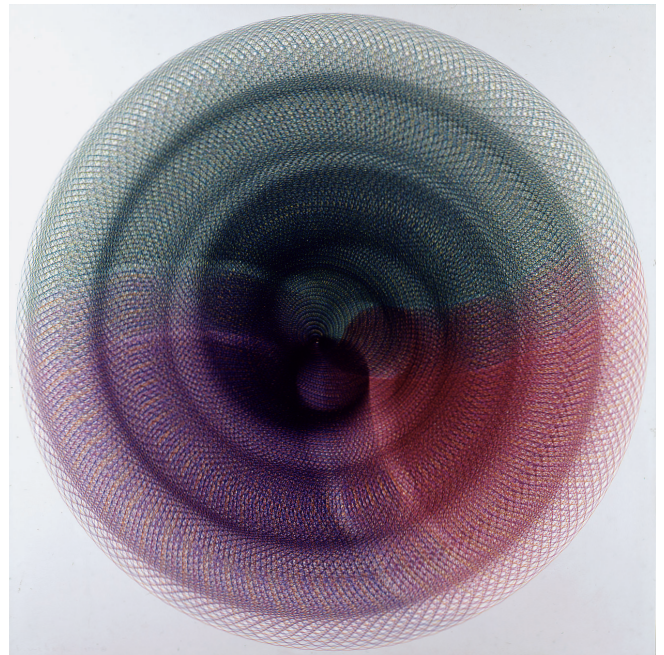
また、私たちはことわざや慣用句などにも「穴」をよく使います。恥ずかしい思いをした時には「穴があったら入りたい」と言い、あまり知られていない良い場所のことを「穴場」と呼びます。不足した時に「穴埋め」をし、じっと食い入るように見つめる時は「穴のあくほど見る」、閉塞状態のとき新風を吹き込むことを「風穴をあける」といった具合です。あまり良くないイメージの言葉では、自分自身で失敗の原因を作ること「墓穴を掘る」、他人に害を与えれば自分も報いを受ける「人を呪わば穴二つ」、姿かたちが違って同類である生き物同士を「同じ穴の貉」と呼んだりします。

ところで、生き物の多くは「巣穴」を作って生活しています。地面や木の幹の穴に巣を作って暮らす動物たちの姿がまずは浮かんで来ますが、よく考えると私たち人間の祖先も洞窟に住んでいました。となれば現代の私たちの住んでいる住居も、外から見れば「穴」と言えるかもしれません。外敵や風雨から守ってくれる家は心地よい空間ですが、閉じこもってばかりいると今度は逆に扉を開けて外をながめたくになります。扉の外からのぞく家の中は、まさに「穴をのぞく」イメージに近いものではないでしょうか。穴の中には何があるのか、穴の向こうはどうなっているのか、ついのぞいてみたくなる「穴」は、魅力に満ちた存在です。

一方で、ドーナツを食べる時、穴だけを残すことはできないように、穴そのものには実態がありません。山根寛斎《折鶴棚》(No.44)は、折鶴図の部分の部分が剥がれており、素材が無である部分、つまり穴によって鶴の形を表現しています。そのほか、穴のように見えるけれど穴ではない作品があったり、平面のキャンパスに穴をあけたことで、新たな空間の広がり生まれた作品があったり……。このコーナーでは「穴」をキーワードに、美術作品をいつもと違った角度から見てみることを提案します。

人も生き物も穴だらけ

生き物の体にはいくつも「穴」があいています。私たち人間の顔だけ見ても、呼吸をするための鼻の穴、音を集めるための耳の穴、食べ物を取り入れるための口、と穴だらけ。なんと皮膚にも「毛穴」という微細な穴があいていて、ふさぐと皮膚呼吸ができないそうです。口のように、ふさいでしまうと死に至る穴もあります。一方で、人は穴をうまく使って人を表現しており、例えば目と口の3個の穴をあけるだけで、ほぼ顔と認識できます。その穴の形を少しずつ変えることで、例えば笑った顔、怒った顔というように表情まであらわすことができます。古代の埴輪は無表情なものもありますが、比較しながら見ると少しずつ表情の違いが見えてくるでしょう。坂本万七の写真作品「埴輪シリーズ」(No.3～9)は、さまざまな埴輪をモデルに撮影したもので、個々の埴輪の魅力を発見することができます。ヘンリー・ムーア「象の頭蓋骨シリーズ」(No.10～19)や野田弘志《化石のある静物》(No.21)、井上泰三《化石(魚)》(No.22)などからも、骨の目や鼻の穴など興味深い穴をたくさん見つけて、いろいろなイメージをふくらませながらご覧ください。



No.31 桑原盛行《一つの円へ》1987-4 1987年



No.21 野田弘志《化石のある静物》1988年



No.37 小林徳三郎 《俎板の野菜》 1947年



No.42 井伏圭介 《布目象嵌銅香炉》 1991年



No.44 山根寛寛 《折鶴棚》 1993年



No.45 黒川清雪 《青磁香炉》 1993年

穴は別世界の入口

私たちの住んでいる住居も、外から見れば「穴」と言えるのではないかな……。先ほどこのように述べましたが、外から中をのぞきこんだ世界、逆に中から見た外の世界というふうに、ほぼ同じ場所にいながら視点を変えただけで全く別の世界が見えるという体験をしたことはありませんか。作家にとっても別世界をのぞくことで生まれるちょっとした新鮮さや驚きが、作品の生まれる原動力になることがよくあるようです。

南薫造《室内から戸外の眺め》(No.27)や宝亀桂子《窓》(No.23)のように、絵画には窓や扉から見た外の景色を描いた作品が多く見られます。室内風景と、窓枠に区切られた外の風景の二つの世界を一つの画面に収めるということは、画家にとって魅力的な構図のようです。窓枠を穴の入口、つまり別世界の入口として見た時、向こうの世界はどうなっているのかというワクワク感を、鑑賞者にも伝えるためのツールとして画中の窓は効果を発揮しているのではないのでしょうか。

世界を反転させる穴

ルチオ・フォンタナ《空間概念—銀のヴェネツィア》(No.28)は、平面であるキャンバスに穴を開けることで三次元の世界へ誘ってくれますが、合わせて、ファンタナが穴を開ける瞬間をとらえたウーゴ・ムラス《フォンタナ》(No.29)を見ることで、二次元から三次元への移行をさらによく伝えてくれます。

桑原盛行は無限に近い線を重ねていくことで、いつしかその塊が穴に見えるような錯覚を鑑賞者に与えます。線が物質や空間に変化していくように見せる、線そのものの持つ力に気づかせてくれます。

そのほか、日常の野外で見つけたマンホールの穴などをモチーフにした赤瀬川原平(No.32~33)や、海岸風景写真の中央に別世界の写真を合成して作品にした小本章(No.34~35)、工芸品では井伏圭介の香炉(No.42)など、穴に魅せられた作家は多数います。私たちにとって身近であり、不思議かつ興味深い「穴」という存在。美術作品の中に見られる穴に親しんだ後に、日常生活の中で「あっ、ここにも」「あそこにも」と探してみてください。何気ない日常の中に新鮮な驚きや発見が、きっとたくさん見つかるでしょう。

(学芸員 中村麻里子)

※本展「穴をのぞく」コーナーは、当館元学芸員・月村紀乃が企画立案したものに、中村が追加補足して構成いたしました。

むすんでひらいて、またむすぶ

はじめに一むすびを生み出すもの

「穴」と同じように、私たちにとって、「むすび」は身近なものです。靴紐をむすんだり、古紙を束ねたり、あるいは髪を結んだり。むすぶ対象やむすぶ方、目的はそれぞれに異なるものの、暮らしの中で、特に意識せず、おこなっていることでしょう。

一方、「むすぶ」という言葉の広がりを目を向ければ、もっといろいろな場面にむすびが潜んでいることに気づかされます。友人と約束をむすぶ、東西を陸路でむすぶ、植物が実をむすぶ……。このように、私たちの身のまわりは、さまざまなむすびであふれており、美術作品にもあらゆるむすびを見つけることができます。

では、作品に見られるむすびは何を、どのようにむすんでいるのでしょうか。作品に潜む「むすび」を一緒に紐解いてみましょう。

むすびを生み出すものについては、「結」という漢字にヒントを得ることができます。「結」は「糸」偏と「吉」の旁から構成されていますが、「吉」にはとじこめるという意味があり、「結ぶ」ということも、そこにある力をとじこめるという意味を持つものでした⁽¹⁾。漢字の成り立ちからも、結びと「糸」は切っても切れない関係であると言えます。

そんな「糸」をモチーフとした森谷南人子の《針と糸》(No.48)は、赤、黄、緑の刺繍糸が色鮮やかな木版作品です。装飾を美しく見せる刺繍糸と、生地を縫い合わせる縫い糸では、糸の撚りや強度、光沢などが異なり、その原料や太さなども多種多様に作られています。また、服のボタンが外れた時には、針に糸を通してボタンをとめなおすように、糸は物と物とを繋ぎ合わせることもできるのです。

糸より少し太さのあるものは「紐」と呼ばれ、紐より太さの



No.27 南薫造 《室内から戸外の眺め》 あるものは「縄」、縄よりさらに太く強度のあるものは「綱」

と区別されています⁽²⁾。

今川良雄《アルピニスト》(No.52)にあらわされた登山家の足元を見ると、登山靴の紐がピンと張った状態で、しっかりと結ばれています。左肩には何重にもして束ねたロープを担ぎ、広げると数十メートルに及ぶであろうことが想像できます。雪山や険しい岩場、急斜面を登る登山家にとって、命を預けるロープはまさに命綱と言えるでしょう。

このように、むすびを生み出す紐状の素材だけでもさまざまで、強度や特性によって、私たちは使い分けをしているのです。

暮らしや文化におけるむすび

私たちがふだん身につけている衣類は、もともと、暑さや寒さから身を守る防護のために用いられていましたが、やがてその目的にとどまらず、素材や色、形などに工夫をめぐらすようになりました。なかでも、日本文化の代表とも言える着物は、むすびの技術によって発達し、装飾性に意匠が凝らされてきたもののひとつです。

宝亀桂子《支度》(No.55)では、和楽器の小鼓を持った女性と、少女の着付けをしている女性が、舞台の支度をしています。なかでも、着物を身に纏ったふたりの女性の腰にむすばれた帯が目を引きます。現代では、このような幅広の帯になじみがありますが、古く帯は細い紐のようなもので、江戸時代頃から、太さが移り変わるなかで、むすび方も工夫されてきたそう⁽³⁾。本作にも見られる、お太鼓結びの他には、文庫結びや、貝結び、浪人結びなどがあります。また、帯が緩んで落ちるのを防ぐための帯締めは、端の始末が祝事と弔事で異なります。このように、むすび方に意味を含め、場面によってむすび分けるのは、日本では着物や水引などに見られますが、世界中でも人々の願いや思いを表現する手段として古くから用いられてきました。

さらに画中を見渡すと、むすびは着物だけにとどまりません。正座をした女性が持つ小鼓には朱色の麻紐があしらわれ、なにやら複雑にむすばれています。これは、「調べ緒」と呼ばれ、紐のテンションを奏者が左手で緩めたり締めたりして音色を調整するものです⁽⁴⁾。小鼓は皮と胴と紐で構成されたシンプルな作りですが、皮は湿度に非常に敏感で、張りや湿り具合などが音に影響するため、奏者はその時々天候に気を遣い、手の反応でバランスを調整していると言います。むすびによって編み出された音とも言えるでしょう。

暮らしにおけるむすびと言えば、食を支えるむすびもあります。徳永善彦《漁夫》(No.63)は、捕獲した魚を運ぶ漁師をおさめた写真ですが、漁のための網や紐を手にしてしています。また、右肩に担いだ木の棒の先には木箱がむすびつけられており、ものを運ぶためにもむすびが生かされていることが窺えます。

この他にも、暮らしや文化におけるむすびを振り返って考えてみると、むすびの多様な役割を実感することができます。

「むすぶ」という言葉の広がり

ここまで、目に見える、物理的なむすびに着目してきましたが、今度は「むすぶ」という言葉の広がりを目を向けてみましょう。

例えば、離れた場所をつなぐために橋を架けたり、線路を通したりすることも「むすぶ」と表現します。電車や新幹線、飛行機などは現代の私たちにとって、行きたい場所へ身運んでくれる欠かせない乗り物です。佐々田憲一郎《福山駅構内》(No.69)は、1948年に福山城址公園の伏見櫓前方の高所から福山駅を望んだ景観を描いたもの。1975年には、新幹線も開通し、時とともに姿を変えながら発展してきた駅ですが、当時から今まで、人々にとって大切な場所をつなぐ「むすび目」であることには変わりありません。

さらに、福山駅から南へ14kmのところに位置する鞆の浦は、古くから潮待ちの港として、国内外の交易で栄えた港です。鞆の生まれで、鞆の風景に特別な思いを持っていたという緒方亮平の《鞆港》(No.67)には、いくつもの船が停泊しており、行き交う人々の面影を映しています。乗り物は、単に場所と場所とをむすぶだけでなく、人々の交流を可能にし、さらには物や文化、経済のつながりを支えているのです。

このように、新たな価値や成果を生み出すという意味から想起されるものとして、果実や野菜などが旬を迎え、実がなることを「実をむすぶ」と表現します。日本で「無花果」の漢字であらわされる「いちじく」は、その漢字が示すように、花の咲かない果物と思われるかもしれませんが、じつは外から見えないだけで、花は実の中に隠れて咲いています。花の存在に気づきにくい植物もあるものの、花の咲かない果実や野菜というのは存在しません。花が開花することで、実へとつながり、ひとつの生命のサイクルを完成させるのです。

南薫造の《りんごの花》(No.72)は実のなる前の花の咲く木を描いた作品です。まるで両腕を広げたように、あらゆる方向に伸びた枝々には白色と桃色の花が咲き、これからりんごの実



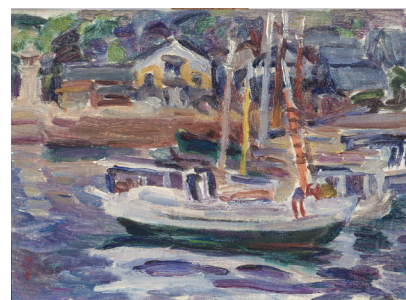
No.48 森谷南人子 《針と糸》 1926年



No.52 今川良雄 《アルピニスト》 1968年



No.55 宝亀桂子 《支度》 1974年



No.67 緒方亮平 《鞆港》 1955年頃



No.72 南薫造 《りんごの花》 1940年代



No.79 宝竜桂子 《集い》 1986年



No.87 香取秀真 《金印(模造)》



No.90 今城国忠 《解放》 1941年

がたわわになることを想像させてくれます。植物におけるむすびは、自然の循環過程におけるひとつの完成形であり、実の中に種を宿す植物にとっては、さらなる生命への架け橋でもあるのです。

人と人とのつながり

命あるものと言えば、むすびという言葉は、私たち人間関係においても、さまざまな側面を表しています。

宝竜桂子《集い》(No.79)は、お茶会の様子を描いた作品です。画中に登場する5人の女性が時を合わせ同じ場所に集うことで、ひとつのコミュニティが生まれています。

共通の体験や、価値観を共有することで、つながりを深めたり、何らかの目標に向かって協力関係を築いたり、あるいは、約束を交わし守り合うことで、互いに信頼関係を構築したり。このようなことは、日々の中で何気なくおこなっていることかもしれませんが、人と関わり合うことは、同時に、自分自身をひらき、相手を受け入れることでもあります。自分なりの表現方法で思いを伝えることで、人とのつながりが生まれていくのです。

たとえ顔を合わせた実際の交流がなくとも、本の著者の考え方に共鳴したり、作品の作者に思いを馳せたり、同じ趣味を楽しむ人に共感した時に、心のどこかでつながったかのような感覚を持つこともあるでしょう。

むすびのかたち—むすんでひらいて、その先へ

誰かとの約束のように、それ自体には実体がなく、目に見えないむすびもあります。人はそのようなむすびを、かたちや文字にして表すことで、証明や心の拠り所としながら、互いに誓いを交わしてきました。例えば、印は、人が契りをむすぶ時や、関係をむすぶ時に、信用の証として使ってきたものです。

香取秀真《金印(模造)》(No.87)は、「漢委奴国王」と刻された金印の模造作品です。もともとあった金印は、中国・漢と親善をむすんでいた地域の為政者に贈られたもので、のちの江戸時代に筑前の国(現在の福岡県)の志賀島で出土しました。当時の中国では、木や竹の札に文字を記録しており、重要な文書が発信者の他には誰にも開かれていないことを示すために、紐で縛ったのち、紐のむすび目を粘土で封じ、その上から印を捺して文字が浮かび上がるようにしたのです。文書を開封するときは、紐を切るか、封泥を破壊する必要があり、物理的にはむすびを解体しながら、親交をむすぶこととなる興味深い例です。

さらに、むすびをひらき、身体のエネルギーが解放される瞬間をかたどったような作品もあります。今城国忠《解放》(No.90)は一見すると、肩の力が抜けて、腕がダラリと落ちたような男性の姿に、「脱力」の言葉が思い浮かべられます。しかし、斜め上を向く顔や、遠くを見つめる強いまなざし、キリッとした眉毛のつり上がり具合に、決断の意思も感じられます。また、身体をやや右にひねり、腕を左右に振った姿は、まるで全力で走り切った後、風に身をまかせたかのように。想像を膨らませると、何らかのしがらみを交わし、解放された時の達成感と、未来へ望みをかけるような動きを読みとることができます。

むすびは、時とともに変化していくものです。長く歩いていると、ふとした時に靴紐が解け、立ち止まってむすび直すという経験は、多くの人が身に覚えがあるでしょう。むすびは、いつか解けることがあると知っているからこそ、紐をむすぶ瞬間に手に力を入れて、ギュッと固くこぶを作り、誰かと大切な約束をむすぶ時には、自分の心に思いを刻むように、そのむすびが解けることのないようにと願うのかもしれませんが、一方で、意図して解くことで制約や束縛から解放され、可能性が広がるむすびもあります。「むすぶ」と「ひらく」という行為は一見、正反対の概念のように見えますが、実は両者は相互に関連しており、表裏一体といえるのです。

本コーナー「むすんでひらいて、またむすぶ」では、作品それぞれの共通点を見つけ、むすびつけてストーリーとして味わうのも、絡み合った糸や知恵の輪を解くように、作品の細かい部分に注目して見るのも、みなさんの自由です。自分なりの方法で、作品とのむすびつきをお楽しみください。

(学芸員 笠原綺華)

【註】

- (1) 白川静『新訂字統』(平凡社、2005年)、260頁
- (2) 羽根田治『結び方全書 暮らしに使える170の結び』(池田書店、2009年)、10頁
- (3) 戸井田道三『結びの文化 紐から帯へ』『きもの文化史』(朝日新聞社、1986年)、106頁
- (4) 西川浩平『カラー図解 和楽器の世界』(河出書房新社、2008年)、90頁

【主要参考文献】

- 額田巖『日本の結び』(講談社、1977年)
額田巖『包み結びの歳時記』(講談社、2023年)